

ALPSプログラム第8回シンポジウム
「新たな時代における学習支援を考えるー学習支援の指針、現状、望ましい在り方ー」

新たな時代の高等教育における 「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能カルーブリック」開発に関する 報告

我妻鉄也(千葉大学 アカデミック・リンク・センター)

1

本日の内容

1. 「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能カルーブリック」改訂の背景
2. ポストコロナの時代に求められる教育・学修支援の専門性に関する調査研究
3. 「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目」改訂版について
4. 今後の展開

2

1. 「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能カルーブリック」改訂の背景 (1)「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能カルーブリック」(第1版)の開発(2015年)

①「能力項目・能カルーブリック」(第1版)開発(2015年)の背景

- 教育や学修を支援する大学職員の能力開発に関しては、先行研究においては、個々の職務からその専門性へのアプローチはあるが職務を横断する教育・学修支援の資質・能力のアプローチが確認されなかった。
- そのアプローチも経験論や私見の範疇に留まるものも多く、必ずしも学術的な客観性が担保されていないという限界が確認された。
- 汎用性・通用性を持った教育・学修支援についての資質・能力を可視化する必要性

岡田他(2016)

3

②教育・学修支援の専門性に必要な能力項目(第1版)(2015年)

	学生・学修支援への関心	担当業務の遂行	大学職員としての共通性
理解する内容	①学生・学修・教育支援の内容 ・教育内容の把握 ・学生・学修・教育支援の設計と実施 ・学生・学修・教育支援活動のプログラム改善 ・学生・学生支援の現状理解	②担当業務の内容 ・課題の設定と問題解決 ・情報収集・整理・分析・発信 ・業務に関する知識 ・様々な経験とその活用	③大学についての知識 ・高等教育・社会・教育に関する知識 ・所属大学についての理解
対人関係	④学生への対応 ・学生対応への基本的姿勢・態度 ・留学生への対応 ・困難を抱えた学生への対応	⑤担当業務への取り組み方 ・担当業務の遂行 ・チームワーク	⑥人間関係の構築 ・人的ネットワーク ・教員との連携・協働
基盤的スキル			基盤的スキル ・キャリアアップ・スキルアップの取組 ・ICTスキル ・物事を広くみる ・語学 ・クリティカルシンキング ・説明できる力 ・文章作成能力 ・メタ的な能力(社会人としてのコンピテンシー)

4

③教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック(第1版)(2015年)

領域	項目 (各領域で含む要素を具体的に示したものを)	S (知識やスキルを発展させ、指導することができる)	A (知識やスキルを実践の場の問題解決に活用できる)	B (身につけた知識を説明できる)	C (知識として身に付けている)
①学生・学修・教育支援の内容	・教育内容の把握 ・学生・学修・教育支援の内容の設計と実施 ・学生・学修・教育支援活動のプログラム改善 ・学生・学修・教育支援の現状理解	学生のニーズを調査し、学習者のニーズにあわせた学修支援を構築し、効果的に実施することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	個々の学生に応じた支援内容・方法を決定し、必要な支援を設計、提供することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学修支援や学修支援の担当における最新の改訂版、講義、講義方法を把握し、必要な支援を設計、提供することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	教育支援や学修支援の担当における最新の改訂版、講義、講義方法を把握し、必要な支援を設計、提供することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。
②担当業務の内容	・課程の企画と問題解決 ・情報収集・整理・分析・発信 ・課題に関する知識 ・様々な情報との活用	所属している課程を把握し、改善することを目的に、情報収集、データ収集・分析、発信の企画、実施を主体的に行うことができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。
③大学についての知識	・高等教育・社会・教育に関する知識 ・所属大学についての理解	高等教育の現状について定期的に分析・検討し、所属大学における教育のあり方について具体的な改善案を策定し、実践の場で実施することができる。	高等教育を取り巻く社会・経済情勢や政策動向などを把握し、所属大学の教育の現状について定期的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	国内外の大学に関する歴史や制度、法政、教育、取組事例などについて最新の知識を学ぶことができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	国内外の大学に関する歴史や制度、法政、教育、取組事例などについて最新の知識を学ぶことができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。
④学生への対応	・学生対応の基本的姿勢・態度 ・学生への対応 ・困難を抱えた学生への対応	学生の対応に関する学内外の活用可能な資源の現状について定期的に分析・検討を行い、より効果的な支援体制・あり方を、実践可能な形で企画・設計し、実施することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学生への対応に関して、学内外の様々な事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学修支援や学修支援の担当における最新の改訂版、講義、講義方法を把握し、必要な支援を設計、提供することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学修支援や学修支援の担当における最新の改訂版、講義、講義方法を把握し、必要な支援を設計、提供することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。
⑤担当業務への取り組み方	・担当業務の履行 ・チームワーク	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。
⑥人間関係の構築	・人的ネットワーク ・教員との連携・協働	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学内外の最先端の取組み事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務について専門的知識やスキルを積極的に分析・検討し、組織上の課題の把握や解決に活用することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。

出典: <https://alc.chiba-u.jp/ALPS/rubric.html>

領域	項目 (各領域で含む要素を具体的に示したものを)	S (知識やスキルを発展させ、指導することができる)	A (知識やスキルを実践の場の問題解決に活用できる)	B (身につけた知識を説明できる)	C (知識として身に付けている)
①学生・学修・教育支援の内容	・教育内容の把握 ・学生・学修・教育支援の内容の設計と実施 ・学生・学修・教育支援活動のプログラム改善 ・学生・学修・教育支援の現状理解	学生の支援ニーズを調査し、学習者のニーズにあわせた学修支援を開発し、効果的に実施することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	個々の学生に応じた支援内容・方法を決定し、必要な支援を設計、提案することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	学修支援に必要な教育領域における最新の改善課題、論点、教育方法を説明することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を把握し、講義、講義方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。また、学修支援の現状を把握し、改善、提議することができる。	教育支援や学修支援の担当に必要な法令遵守の意識、倫理観を身に付けている。また、学修支援に必要な教育課程の基本的枠組みと個々の授業が扱っている教育内容の概要を理解している。

(2)「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック」改訂の背景

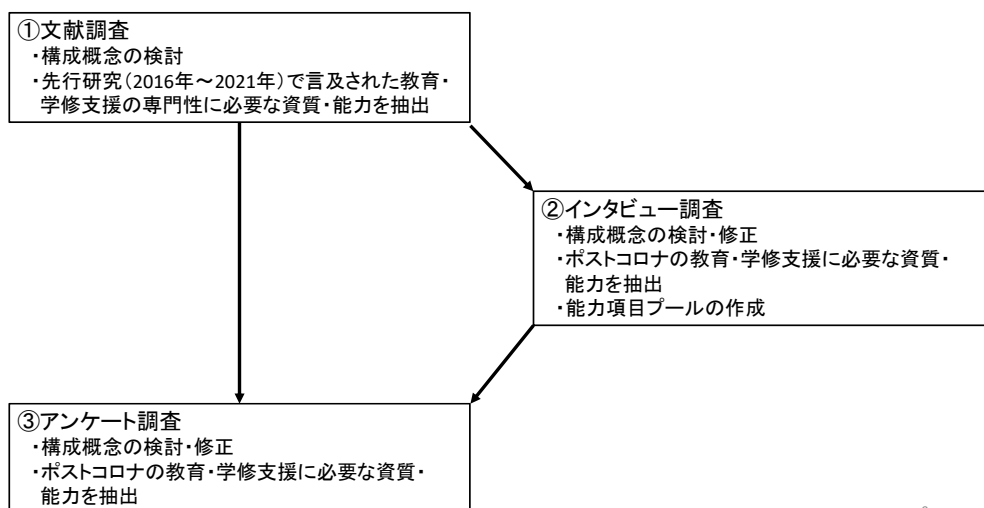
- 2020年春に始まったコロナ禍への対応としてオンライン授業の導入が急速に導入されるなど、日本の高等教育環境は大きく変容
- この間の緊急対応としてのオンライン授業導入はすでに過去のものであり、今日ではポストコロナ時代の教育の質向上の手段としてのこの経験をどのように生かすかということが課題の中心
- 教育活動支援や学修支援の実施においても新しい環境への対応が必要
- 文献調査、インタビュー調査、アンケート調査を実施し、ポストコロナの時代における教育・学修支援において求められる資質・能力や専門性を明らかにするとともに、これらの専門性を向上させていくための能力指標として「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目」を改訂
- ポストコロナの時代における教育・学修支援に求められる専門性の向上を実現するために能力指標を、段階を踏まえて体系化・可視化することを目指して「教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック」改訂版を作成中

2. ポストコロナの時代に求められる教育・学修支援の専門性に関する調査研究

(1) 調査研究の枠組み

- 「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック」(第1版)との連続性を考慮しつつ、ポストコロナの時代に求められる教育・学修支援の専門性に必要な資質・能力を抽出
- 岡田他(2006)、白川(2006)のアプローチを採用し、①文献調査、②インタビュー調査、③アンケート調査から構成

(2) 調査の関係性



9

(3) 文献調査

① 調査の目的

調査は、教育・学修支援専門職に必要な能力を明らかにすることを目的に、大学職員や教育支援、学修支援について論じられた先行研究・先行調査を収集・分析したものである。

本調査によって既存文献資料で指摘されている教育・学修支援専門職に必要な能力を抽出することにより、大学職員を対象とするインタビュー調査の分析結果とともに、教育・学修支援専門職に求められる能力項目をプールすることが可能となる。これらの能力項目のプールは、大学職員を対象とするアンケート調査を設計に活用するとともに、能力項目や能力ルーブリックの策定の根拠資料として活用する。

10

② 調査の対象

- 2016年から2021年までに発行された文献を対象
(前回(2015年)は2000年～2015年に発行された文献を対象)
- データベースは「CiNii Articles」「国会図書館オンライン」「IRBD」を使用
- 検索ワードの14の組合せを設定

	検索ワード
1	「大学」+「職員」+「能力」
2	「大学」+「職員」+「SD」
3	「大学」+「職員」+「コンピテンシー」
4	「大学」+「職員」+「支援」+「教育」
5	「大学」+「職員」+「支援」+「学習」
6	「大学」+「職員」+「支援」+「学修」
7	「大学」+「職員」+「支援」+「学生」
8	「大学」+「職員」+「支援」+「授業」

	検索ワード
9	「大学」+「図書館」+「支援」+「教育」
10	「大学」+「図書館」+「支援」+「学習」
11	「大学」+「図書館」+「支援」+「学修」
12	「大学」+「図書館」+「支援」+「学生」
13	「大学」+「図書館」+「支援」+「授業」
14	「大学」+「職員」+「研修」

11

③ 調査・分析のプロセス

- 14の検索ワードを文献データベースにて検索した結果、**592件**(「CiNii Articles」252件、「国会図書館オンライン」250件、「IRBD」50件)の文献を抽出
- データベース間での重複を取り除いた**255件の第一次文献リスト**を作成
- 文献タイトルおよびジャーナル名を等をもとに、3名の担当者が**4段階の評価基準**にて第一次文献リストを評価
- 評価基準は、教育・学修支援の資質・能力を検討する上で、
 - 4: 必ず参照すべき文献
 - 3: 参照する必要性が高い文献
 - 2: 参照する必要性が低い文献
 - 1: 参照する必要性はない文献
 の4段階からなる。
- **平均値2.0より大きい文献**を残し、関連性の低い文献を除外
- **119件の第二次文献リスト**を得た。

12

- 3名の担当者が119件の文献を精読し、291件の資質・能力を抽出
- 項目として61カテゴリを、領域(大項目)として9領域を、メタ領域を3領域を設定

領域	大項目	カテゴリ
1. 社会人に求められるスキル・態度	1. 自己研鑽・向上 2. 協働 3. 社会人としての汎用的スキル	1.自己研鑽 2.改善志向 3.向上意欲・野心 4.学内外のネットワーク 5.学内外での連携 6.リーダーシップ 7.チームワーク 8.ファンリテーション 9.職員同士の連携 10.職業生活や社会生活全般に必要な技能 11.コミュニケーション 12.コミュニケーション・ネットワーク形成 13.コミュニケーション・ネットワーク形成・リーダーシップ 14.コミュニケーション・プレゼンテーション 15.コミュニケーション・リーダーシップ 16.語学力 17.学歴 18.プレゼンテーション 19.コーチング 20.メンタリング 21.カウセリング
2. 大学職員に求められる知識・スキル	4. 大学職員としての業務スキル 5. 大学に特有に求められる知識・スキル 6. 情報基盤・情報収集・分析に関する知識・スキル	22.自大学に関する理解 23.企画・提案力 24.企画・提案力・リーダーシップ 25.企画・提案力・リーダーシップ・コミュニケーション 26.教員との連携 27.教員との連携・コミュニケーション 28.業務知識・能力 29.マネジメント 30.課題発見・解決能力 31.大学職員としての知識・能力 32.スペシャリスト・ジェネラリスト的専門性 33.政策理解・立案 34.政策理解・立案・リーダーシップ 35.マーケティング 36.高等教育に関する知識・理解 37.大学の特定分野についての深い知識・能力 38.海外の大学に関する知識・理解 39.IR 40.情報収集・分析 41.ICT
3. 教育・学修支援に関わる知識・技能	7. 教育のあり方への知識・理解 8. 学生の理解・支援(障がい学生・留学生も含む)に関する知識・スキル 9. 他者支援(学生に留まらず、同僚の教育職員を含む他者全般も含む)に関する知識・スキル	42.教育・学習支援 43.カリキュラムへの理解 44.教育の経験 45.教育方法への理解 46.学習理論 47.ID 48.教育内容に対する知識・理解 49.教育評価への理解 50.学生への知識・理解 51.学生目録 52.留学・留学生対応 53.学生とのコミュニケーション 54.学生とのコミュニケーション・多様性理解 55.学生とのコミュニケーション・学生への知識・理解 56.アカデミック・アドバイザー 57.学生発達理論 58.障害学生への対応 59.アカデミック・ライティング 60.ライティング 61.キャリア・アドバイザー

⇒既存の「教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック 行動特性まとめ(領域・項目・行動特性)」から外れるものはなし

13

(4) インタビュー調査

①調査の目的

インタビュー調査はALPS履修証明プログラム構築の基盤となってきた「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目」「教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック」をポストコロナの新常態での高等教育における教育・学修支援の新たなニーズに適応したものに改訂するために、コロナ禍の下での教育環境においてどのようなニーズが生じているのかを明らかにすることを目的とする。

14

②調査対象

- 高等教育機関において教育・学修支援に携わっている実務家(管理職級、一般職員)で、2015年度インタビュー調査実施時にインタビューを受けた者やALPS履修証明プログラム修了生の中から、設置種別(国公私)、職種(学務系職員・図書系職員)、職階(管理職[部長・課長]・初級管理職[課長補佐・係長級]・一般職員)などの多様性を配慮してインタビュー対象者を選定した。インタビュー対象者は21名であった。調査対象は表1のとおりである。

表1. インタビュー調査対象者数

	学務系職員/図書系職員			合計
	管理職	初級管理職	一般職員	
国立大学	3	2	8(1)	13(1)
私立大学	3	0	5	8

※括弧内の数値は図書系職員の対象者数(内数)

15

③調査方法

- 調査期間:2021年12月～2022年4月
- 調査方法:半構造化インタビューを実施(1時間～1.5時間)
- 調査項目:若手・一般職員を対象とした項目、管理職を対象とした項目を設けた。

表2. 若手・一般職員を対象とした調査項目

基礎項目	1) 現在の部署での業務内容 2) これまでの異動の状況 3) それぞれの部署での業務内容
質問項目	1) 自分自身の強みと思っていること(今の業務の中で得意なこと、役に立っていると思うこと)について 2) これまでの教育課程や授業支援などに関する仕事、学生に接する中で時間がかったこと、他の人の助けを求めたこと 3) 2)を振り返ってみて、どうい力・能力があればうまくできたと思うか 4) 大学で学生に接する仕事の際に必要な/あったほうが良いと思う能力。特に (ア)コロナ禍の下において、新たに必要性を認識した能力は何か。 (イ)そのうち、昨年来、コロナ禍の下での様々な経験を通じて身についたと感じている能力は何か。 (ウ)ポストコロナの教育・学修支援において新たに必要となる/重要度が増すと思われる能力は何か。 5) 自分の能力を向上させるため(キャリアアップ)に行っていること、心掛けていること 6) 自分が受けてみたいと思う研修 7) その他

16

表3. 管理職を対象とした調査項目

基礎項目	1) これまでの異動の状況 2) それぞれの部署での業務内容
質問項目	1) 大学で学生に接する仕事を担当する際に必要／あったほうが良いと思う能力。特に (ア) コロナ禍の下において、新たに必要性を認識した能力は何か。 (イ) そのうち、昨年来、コロナ禍の下での様々な経験を通じて身についたと感じている能力は何か。 (ウ) ポストコロナの教育・学修支援において新たに必要となる／重要度が増すと思われる能力は何か。 2) これまで自分の職務上の能力を向上させるために行ってきたこと、心掛けてきたこと 3) これまで受けたことのある研修でよかったものとその理由 4) 現在の若手・中堅の職員をみていて、教育課程や授業支援などに関する仕事、学生に接する仕事を行うために不足している、十分ではないと感じる能力やポイント。特にコロナ禍において、特に不足している、十分ではないと感じた能力やポイントは何か。 5) 大学に対する対応、教員との協働に関して、管理的職務の中で見えてきたこと、気が付いたこと 6) その他

④インタビューデータの分析

➤ 分析方法:

- ・逐語録を作成し、各インタビューの記録内容から、**資質・能力に関する項目を抽出**
- ・資質・能力に関する言及がみられたパラグラフには**1次ラベル(行動特性)**を付与
- ・1次ラベル(行動特性)は「**教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック(第1版)**」作成時に抽出された**180の行動特性**を使用
行動特性 (<https://alc.chiba-u.jp/ALPS/rubric.html>)
- ・180の行動特性に該当しない場合には**新規の行動特性**として1次ラベルを付与するとともに**行動特性案を提示**
- ・以上の分析作業を2名の教職員が担当

➤ 分析結果:

- ・21名のインタビューデータは4,089パラグラフに区分
- ・インタビュー対象者に関わるものは2,116パラグラフ
- ・1次ラベル(行動特性)の付与数は2,721
- ・行動特性の出現回数の上位は表4のとおりである。

表4. 行動特性の出現回数

行動特性	出現回数	項目	領域
・新規	117(4.2%)	・新規	・新規
・ICT等の新しいテクノロジーに対応する。	80(2.9%)	・ICTスキル	・基盤的スキル
・所属大学の状況を理解している。	79(2.9%)	・所属大学についての理解	③大学についての知識
・学生の立場に立つ。	78(2.8%)	・学生対応への基本的姿勢・態度	④学生への対応
・効果的に情報を発信する。	64(2.3%)	・情報収集・整理・分析・発信	②担当業務の内容
・他箇所と連携する。	61(2.2%)	・人的ネットワーク	⑥人間関係の構築
・相手の立場で考えることを意識している。	54(2.0%)	・学生対応への基本的姿勢・態度	④学生への対応
・現代の学生の状況を理解している。	53(1.9%)	・学生・学生支援の現状理解	①学生・学修・教育支援の内容
・教員との協働を意識している。	51(1.8%)	・教員との連携・協働	⑥人間関係の構築
・同僚と協調して職務を遂行する。	47(1.7%)	・チームワーク	⑤担当業務への取り組み方

- ・新規の行動特性は117項目。表現や近い内容の行動特性をまとめるなどの調整を行い、37の新規行動特性に整理。その後、更なる集約や整理を行った結果、出現回数の上位の項目は表5のとおりとなった。

表5. 新規行動特性の出現回数

行動特性	出現回数
・想定外の事態に臨機応変に対応することができる。	18(0.7%)
・リスクを想定して行動する。	9(0.3%)
・他者のICT利用を支援する。	9(0.3%)
・ICTを利用したサービスを提供する	7(0.3%)

(5) Webアンケート調査(第2回『教育・学修支援の専門性に関する大学職員調査』)

①調査概要

- 目的:ポストコロナの大学における教育・学修支援の専門性に関する資質・能力のあり方、またその研修プログラムに対するニーズや大学職員としてのキャリア観を把握すること
- 対象:全国の国公立私立大学(790校)の大学職員
(令和3年度学校基本調査職務別職員数:116,847人(医療系を除く))
- 期間:2022年7月14日(木)～8月5日(金)
- 調査方法:匿名Web回答方式のアンケート調査
- 配票方法:
 - ・全国の国公立私立大学(790校)に郵送法にてアンケート調査依頼(1校につき2票)(1,580票)
 - ・国公立大学図書館協会から加盟館宛てへメールリストを通じてアンケート調査依頼 4,617人
 - ・ALPS友の会登録者へメールリストを通じてアンケート調査依頼 656人
 - ・CEREAL会員へメールリストを通じてアンケート調査依頼 62人
 - ・学内職員宛て一斉配信メールにてアンケート調査依頼 714人
- 回収票数:1,360票/7,629票 (回収率:17.8%)

21

②調査項目の選定

- 文献調査及びインタビュー調査から得られた知見を利用し、教育・学修支援に求められる大学職員の資質・能力を明らかにすることを目的としたアンケート調査を設計
- 具体的な調査項目は、**教育・学修支援に関連する資質・能力を測定する48項目**(「あてはまる」～「あてはまらない」の5段階リッカート尺度。反転項目を含む。)、教育・職務経験年数、研修・資格取得経験、勤務大学での評価や業務量、パーソナリティ、基本属性等

③分析方法

- 尺度項目の評価は、①天井・床効果、②項目間相関、③I-T相関、④各項目を除外した場合の α 係数、⑤G-P分析によって行い、構成概念妥当性は因子分析により、信頼性は α 係数により検討することとした。

22

④資質・能力尺度の分析結果

- 項目分析結果:
 - ・1,360件の回答のうち、資質・能力尺度項目に関する分析では分析対象とならない者を除く1,338名を分析対象(回収率:17.5%)
 - ・1,338ケースについて、反転項目2項目を除く46項目について項目分析の結果、以下の結果が得られた。
 - 天井・床効果について
天井効果を(Mean+SD>5)を示す質問項目が10項目確認された。項目の内容を確認し、削除することとした。
 - I-T相関について
I-T相関係数は0.38～0.67の範囲であり、著しく相関が低い項目は確認されなかった。
 - 各項目を除外した場合のCronbachの α 係数について
いずれも0.94以上であり、内的一貫性を脅かす項目は確認されなかった。
 - G-P分析について
四分位法に基づき上位1/4群と下位1/4群に分け、各項目得点の平均値についてt検定を行った結果、いずれの項目でも有意差が確認された。

23

➤ 信頼性・妥当性の検証結果:

- ・項目分析の結果、得られた36項目について探索的因子分析(最尤法、Promax回転)を実施
- ・ガットマン基準および因子負荷量が0.35以上の項目を採用し、複数の因子に対して重複した負荷を示した項目を除外することとし、分析を繰り返し、最終的に**4因子15項目を採用**
- ・各因子と評価尺度全体のCronbachの α 係数は、**因子1が0.88、因子2が0.81、因子3が0.79、因子4が0.73、評価尺度全体が0.88**であり、各因子と評価尺度全体に高い信頼性を確認

24

表6. 探索的因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1: 多様な学生の理解及び対応				
Q9_20. 学生に適切なアドバイスする方法を知っている	0.863	-0.005	-0.036	0.029
Q9_21. 障がいをもつ学生への対応方法を理解している	0.786	-0.022	-0.072	0.071
Q9_22. 学生のニーズを把握する	0.736	0.027	0.119	-0.037
Q9_14. 多様な学生層へのコミュニケーション方法を理解している	0.722	-0.007	0.006	0.041
Q9_18. 学生と適切な心理的距離感を保つことを理解している	0.722	0.043	0.017	-0.089
因子2: 業務への取り組み方				
Q8_13. 担当業務の進め方を絶えず見直す	0.033	0.684	-0.112	-0.087
Q8_20. データや統計を使用して実態を把握する	-0.062	0.681	0.043	0.059
Q8_11. 新たな業務に率先して取り組む・チャレンジする姿勢を持つ	0.048	0.677	0.072	-0.034
Q8_22. リスクを想定して行動する	0.028	0.637	-0.101	0.002
Q8_7. 収集した情報を分析する	-0.081	0.633	0.075	0.075
Q8_21. 自主的にキャリアアップ/スキルアップの取り組みを行う	0.093	0.532	0.039	0.023
因子3: ICTの利活用				
Q9_7. ICTを利用したサービスを提供する	0.063	-0.113	0.873	-0.004
Q8_2. ICT等の新しいテクノロジーを活用する	-0.061	0.108	0.757	0.001
因子4: 高等教育関連法規及び高等教育政策の理解				
Q9_2. 学校教育法や大学設置基準等の関連法規を理解している	0.012	-0.015	-0.033	0.824
Q9_15. 文部科学省や中央教育審議会等の政策文書を読んでいる	0.016	0.036	0.038	0.670
因子間相関				
因子1		0.440	0.393	0.515
因子2			0.576	0.576
因子3				0.455
因子4				

25

➤ 『教育・学修支援の専門性に関する大学職員調査』(第1回)の因子分析との差異:

- ・因子分析における項目や調査対象が異なるため、厳密な比較対象にはならないが、前回調査で抽出された因子は「学生・教育への関心」「他者との関わり」「高等教育の構造の理解」「仕事の改善への姿勢」「学内外の資源の活用」であり、今回の調査で抽出された因子は「多様な学生の理解及び対応」「業務への取り組み方」「ICTの利活用」「高等教育関連法規及び高等教育政策の理解」である。
- ⇒ 両調査において抽出された因子から、コロナ禍に実施された本調査では「ICTの利活用」に関する因子が抽出されたという違いがみられた。

我妻他(2022)

26

➤ 基準関連妥当性(併存的妥当性)の観点から研修参加度との関連性:

・4つの因子で研究参加の度合いが高いほど平均値が高くなる傾向があり、分散分析の結果、1%水準で有意差が確認された。効果量についても中程度の値が得られた。

表7. 各因子と研修参加度の関連性

	研修参加無		研修参加少		研修参加中		研修参加多		F	p	η^2
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
因子1: 多様な学生の理解及び対応	-0.432	0.951	-0.078	0.907	0.264	0.857	0.483	0.847	51.465	0.000	0.104 (中程度)
因子2: 業務への取り組み方	-0.333	0.945	-0.109	0.892	0.234	0.827	0.452	0.821	40.037	0.000	0.083 (中程度)
因子3: ICTの利活用	-0.325	0.925	-0.093	0.888	0.219	0.836	0.425	0.813	36.343	0.000	0.076 (中程度)
因子4: 高等教育関連法規及び高等教育	-0.405	0.903	-0.135	0.828	0.285	0.787	0.557	0.726	68.227	0.000	0.133 (中程度)

⇒ これらの関連性や効果量が確認されたことから、構成概念の妥当性を有している。

27

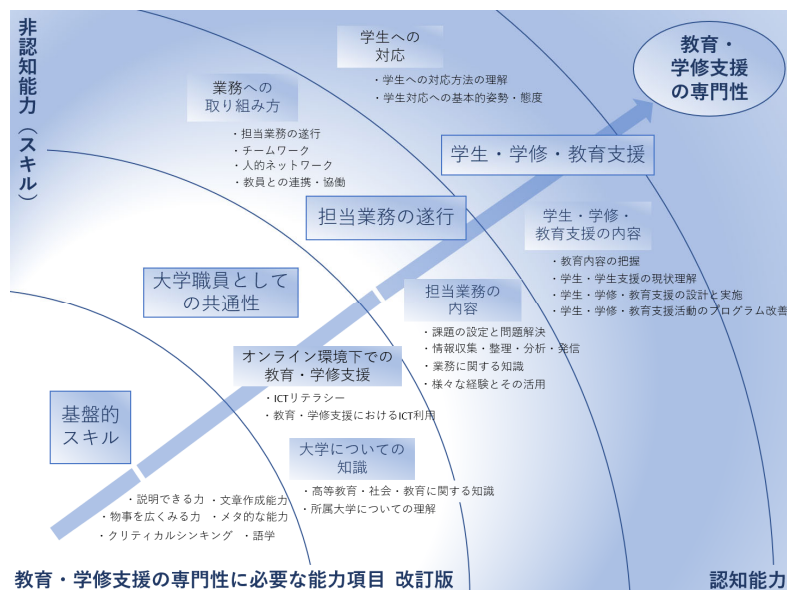
3. 「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目」改訂版

- 「文献調査」「インタビュー調査」「アンケート調査」の調査結果を整理することを通じて、「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目」改訂版を策定
- 「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目」第1版での能力項目の枠組み(「学生・学修支援への関心」「担当業務の遂行」「大学職員としての共通性」)を継承しつつも、各能力項目を知識・技能の観点から分類する枠組み(「理解する内容」「対人関係」「基盤的スキル」)を「認知能力」「非認知能力(スキル)」「基盤的スキル」に変更
- 領域については、第1版と同様、7領域から構成されるが、「ICTの利活用」に関する因子が抽出されたことを踏まえて「オンライン環境下での教育・学修支援」を新たな領域として加えた。一方、第1版の「人間関係の構築」の領域については「業務への取り組み方」の領域に統合

認知能力・・・「知能検査で測定できるような能力」「学力」
 非認知能力・・・「思考や感情や行動について個々人がもつパターンのようなもの」
 認知能力と非認知能力は別個に存在するのではなく、互いに関連する心理特性
 小塩(2021)

28

・教育・学修支援の専門性に必要な能力項目
改訂版



4. 今後の展開

- 「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目」改訂版を発展させ、教育・学修支援に求められる専門性の向上を実現するために能力指標を、段階を踏まえて体系化・可視化した「教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック」改訂版の作成
- 「教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック」改訂版を基礎に、教育・学修支援専門職の養成にかかる入門レベルから上級レベルに至る、段階的なSDプログラムの開発と運営
- 養成された専門人材の活躍の場を、彼ら自身が所属する機関のみならず、全国の高等教育機関に波及させる新たなメカニズムの構築

参考文献

岡田聡志・白川優治・米田奈穂・谷奈穂・御手洗明佳・多田伸生・奥田聡子・竹内比呂也, 2016, 「教育・学修支援に求められる大学職員の資質・能力と専門性に関する探索的研究」『大学教育学会誌』38(2): 47-56.

小塩真司, 2021, 「非認知能力とは」小塩真司編『非認知能力-概念・測定と教育の可能性』北大路書房, 1-10.

白川優治, 2016, 「教育・学修支援に必要な能力項目・能力ルーブリック(試案)」千葉大学アカデミック・リンク・センター編『新しい専門的大学職員に求められる教育・学修支援の専門職性とその養成』千葉大学アカデミックリンクセンター, 8-36.

我妻鉄也・岡田聡志・松本暢平・池尻亮子・谷奈穂・伊勢崎奈津子・加藤学・竹内比呂也, 2022, 「ポストコロナの時代における教育・学修支援の専門性に関する探索的研究」大学教育学会2022年度課題研究集会実行委員会編『大学教育学会 2022年度課題研究集会要旨集』大学教育学会, 82-5.

ご清聴ありがとうございました。